

心の知覚と道徳的判断について
唐沢かおり（東京大学人文社会系研究科）

社会心理学では、近年、心の知覚と道徳的判断との関係に関する研究が精力的に進められている。ここでいう心の知覚とは、主に心的機能の知覚に関することであり、様々なエージェントがどのような心的機能を持つと私たちは素朴に理解しているのか、また、素朴理解の構造がどのようになっているのか、という問題が検討されている。これまでの研究では、心的機能をまとめる次元が 2 次元性を持つこと、また、その一方が比較的高次元な認知能力に関わるものであるのに対して、もう一方は基本的な感情や主観的な経験に関わるものであることが主張されている。例えば、グレイら Gray, Gray, & Wegner, 2007 など）は、何かしらの振る舞いをする多様なエージェントに対する判断結果に基づき、心の知覚が主体性（agency: 自己統制、道徳性、記憶、感情認知、計画能力、コミュニケーション、思考など）と経験性（experience: 飢えや痛み、快を経験する能力、感情を経験する能力など）の二次元で構成されることを主張している。また、人間らしさ（humanness）の認知を構成する要件について検討したハズラムら（Haslam et al., 2005 など）は、人間が他の動物と区別される特徴として「人間の独自性（human uniqueness）」を、またモノと区別される特徴として「人間性（human nature）」を挙げているが、前者はグレイらの主体性と、また後者は経験性とほぼ同じような内容を持つのである。

これらの 2 次元は、道徳的判断においては、ターゲットに付与される道徳的地位（moral status）—主体（agency）または客体（patiency）としての認知—と関連している。前者は、心の知覚における主体性や人間の独自性の認知に由来するもので、道徳的な行為主体としての責任とそれに伴う評価（道徳的な行動をとり、非道徳的な行動を抑制する責任、また道徳的行動には賞賛、非道徳的行動には非難）の付与をもたらす。一方後者は、経験性や人間性の知覚から生じ、道徳的（非道徳的）行為の受け手として苦痛から守られる権利を持つことにつながる。

このような心の知覚と道徳的地位のとの関係に関する議論は、いくつかの社会心理学的な検討課題を生むことになる。例えば、心の知覚が道徳的地位の付与を生むことはそのとおりであるが、ターゲットに対して特定の道徳的取り扱いを行うことが、逆に心の知覚に影響を与えること、また、主体と客体が、社会的な相互作用に見られる道徳的な「シナリオ」を構成する相補的な役割となっており、一方の存在を認知することが他方の存在についての暗黙裡の推論を喚起すること、さらには、両者の関係は、心的機能を持たないと考えられるターゲット（モノなど）についても適用可能であることなどである。

本発表では、これら近年の研究動向を展望した上で、発表者がこの問題と関連して行っている実証的な検討結果を紹介し、心の知覚と道徳的判断研究の課題や応用的展開の可能性について議論する。